

真黒になって集め歩き燃料としていますが、年々疲労感が濃くなって参ります。

時代の流れとはいえ、贅沢三昧の現今、少々戸惑いを感じながらささやかに生きております。

父母の血と涙で築きあげたこの銭湯の灯を何とか消したくないものと、日夜頑張っている毎日でございます。

何は無くとも二男一女の母として、孫八人が宝です。

私の敗戦体験記

北海道 木村 久美子

私の父は、昭和十八年春に伯父とともにハラヘイに開拓団員として渡満し、十月には家族も呼び寄せたのとことである。

その後、気ままな末っ子である父は、鉄嶺の軍の倉庫と畑の管理の仕事に移り終戦を迎えたのである。

終戦の詔勅がラジオから流れ、父が男泣きに大声で泣いたのを見たのは私の小学校二年のときである。

その翌日であつたらうか、倉庫のあちこちに見知らぬ人の影が見え隠れし、夜霧の中を親に手をちぎれるように引っ張られ裸足で逃げ回り怖く、冷たかったのを今でも覚えていいる。

そして、八月三十日の昼下がりに管理人の家族は倉庫の屋根裏に隠れるように指示があり、全員息を殺して隠れた。私は仏様を背負わされて隠れたことを覚えている。隠れたのは大人ばかりではない。幼児も赤児もいる。耐え切れなくむずかり、声を出す。身のちじむ思いで皆が耳をそばだてる。階下の様子が変わらなければホッとする。

だが赤児は息苦しさに泣き出す。母親が、この子のために皆に迷惑がかかってはと赤児を抱いて降りて行った。その物音に兵士が気付いてやってくる。早足の靴音、皆生唾を呑み込んで聞きいる。

次の瞬間、赤児の母親の悲鳴のような「どうか、私とこの児を一思いに殺して下さい」……。と

屋根裏に隠れている男子の最年長者は、私の兄（当時小六）であつた。即救援に下りた。二、三回兵士と兄の

やり取りの言葉が聞こえたが、そのときの母の顔が蒼白となっていた。数分後、数人の靴音とともに下から、日本人の救援部隊の音が聞こえ屋根裏から皆が下りた。誰も口を開く者はいない。

そして、倉庫を出たときは夕日の日差しであったように思えたが、救援隊の背の低い中年の小肥りのおじさんに連れられて数メートルかを歩いた。

父が、路上に血まみれになって、その上七転八倒したので土が血の上に黒砂糖色に付着していた。

と思った瞬間、母は「お父さん」と悲鳴のように二声だけ出して、絶句した。

あの場面は、その後の私の人生に有形無形の影響をもたらし今も脳裏に焼き付いて忘れることは出来ない。

中年の小肥りの救援隊のおじさんに誘導されバス会社の社宅の避難場所へと歩きながら、母は「お父さんが死んだら、私達だけ生きて日本に帰るわけにはいかないから、そのときは、皆で井戸に飛び込んで心中しようネ」と私達子供に言い聞かせ当然のように納得したものだ。

父は、ソ連兵に槍で三十二か所、銃で三か所撃たれたものの使用していた中国人が兵として参戦させられていて、父の姿を見、胸部に大きな石をのせ、急所をはずしてくれたため一命を取り止めました。その中国人は、他の兵士になぜそうするのかと問われ、「コイツが憎いから重い石をのせてやる」と答えたそうだ。

その後の私の人生に苦しいときに見え隠れし生きる道しるべと支えとなっているのは、この中国人と救援隊のおじさんの落着いた励ましの言葉と行動でした。同じ極限状態におかれてのあのときの行動、中国人には引揚げるまでコウリヤンを続けて届けていただいた。共に御恩を受けながら今だ完全に立ち上がっていない自分をもどかしく思います。

父はその後鉄嶺の鉄道病院に一月以上入院し、廊下で聞いたガーゼ交換のときのうめき声と「神も仏もあるものか」と怒鳴っていたあのときのことは今も耳に焼き付いて忘れることは出来ません。

それから私達の避難生活が始まりました。身重だった母が動けなかったため、女性は男の餌食でもあって外出

は出来なかったので、小六の兄が納豆や豆腐や大福等を売り、私はその後を付いて歩いたものです。ソ連兵は子供好きで兄を気の毒に思い大福を買ってくれたまでは良かったが、一口食べて、口に合わず兄の顔に思い切り投げつけ、真赤になった兄の頬、日本兵士の病院に行き金網越しに痛々しい松葉杖の傷兵士達にお情けで納豆や豆腐を買ってもらったこと、今、あの人達はどうされているのだろうか。

鉄嶺駅付近で、石炭の燃え残りのコークスのようなものを拾いに行き弾丸の流れ玉が兄の耳元をかすめ、驚いてひっくり返ったこと、中国人の子供達に日本人の子だと追っかけられ大きな兄が先にごんごん逃げ、足の遅い私はこわくてワァーワァー泣きながら逃げ回ったこと、避難場所でのお姉さん達、坊主頭で男装しソ連兵達がかかるたびに押入や屋根裏に隠れたこと、二十一年三月に母が弟を出産、汚れた毛布一枚で仕切ったの産室としたが、うなり声が聞こえて、今思えばお姉さん達も母も不憫であった。

弟のおむつは米のとき汁で洗わされ、冷たかったこ

と、暗闇の凍り付いた井戸端で、強要を拒み銃で撃たれたのであろう若い娘さん、「お母さんお母さん」と血を流し泣いていた満州特有の風の冷たさを思い出す。

一緒に渡満した伯父は、ハラヘいでソ連兵との交戦で戦死、老人子供を避難場所へと、リヤカーで移動中に伯母は、オオカミの群れに逢い満州の山中で命を散らしたと伝え聞き遺骨は今だない。昨今は婚家の御仏壇をお守りするのが精一ぱいの私、せめて満州に向けて手を合わせ御冥福を祈りたい。

そして、昭和二十一年六月一日、長時間、長い行列の順番を待ち、DDTを全身臍白に振り掛けられ、手のひらに印を押され、余分なお金や物は持たぬかと着物の衿やショーツの真中まで検査されたとの情報が届く。貨車で嵐の中、鉄嶺駅を出発引揚げへの第一歩である。屋根のない貨車に強い風雨、一つ二つ持ち入れた洗面器や鍋を持って親達は、子供の頭の上に立ち通しであった。コロ島港から引揚船軍艦に乗り、船の中で寝ていると上からシラミがポトポトと落ちて来た。弱った体調の子供や病人が昇天されるとどこから花が出て来たのか海葬され

ていたことを思い出す。

それでも、博多港に上陸したときの日本の土の第一歩を踏みしめたときの安堵感と嬉しさは忘れられない。ぎゅうぎゅう詰め窓から出入りの汽車に乗り新聞紙を床に敷いて座れると上等で立ち放しのときも長く木造の札幌駅を小踊りで通った喜びは忘れない。

父の実家で、無事帰国の涙での対面は感激であった。

だが、「神も仏もあるものか」と怒鳴った父は、当時米兵を相手として生計する女性達と米兵の正式な結婚を取り計らったり、貧困な人々に力を注いでまた信仰に深く身を投じ家庭を一切顧みずになった。母が住まいもなく家族皆で住み込める留守番を兼ねた会社を探し兄と働き、縦三十センチ、横二十五センチくらいの袋の中にポロ布を詰めて継ぎ合わせた布団が一、二枚支給されそれを家族皆で敷いてゴロ寝をした。背中がゴツゴツとあまり気持ちの良くなかったことを覚えていた。鍋に湯を沸かしたが、中に入れる物が何もなく食べ盛りの子供五人を前に途方にくれたと母がよく話していたことを思い出す。

避難場所で産まれた末弟は、私の背中にジワァーと小水の温かい感触を残して、時々私の頭髪を引張りながら昭和二十二年一月一日私が学校から帰ると栄養失調のためか、わずか十か月の生命の息を引き取った。

私達は、避難生活の間一度も入浴はしなかった。それは、弟の生命と同じくらい十か月以上ではなかったかと今にして思う。

私が小学校二年で見聞した社会は、中学生頃になって、人間に対し、異性に対し様々な疑問をもたらし、藤原ていさんの「流れる星は生きている」宮尾登美子さんの「朱夏」をむさぼり読んだ。藤原ていさんの「流れる星は生きている」は作者のひたむきな生き方と家族を良くまとめて生きている姿が、父が外を向いて帰らない私の心に指針として今も生きている。

又、中学、職場と、数知れぬ友人に沢山の助けを受けて今日まで生きてこられました。

最後に、敗戦の体験から抜け切れずに大変な結婚生活に耐えてくれた夫と、長女が小学校二年のときには八月十五日には一日長女の行動から視線を離せなかったよう

な親を持った二人の娘に御苦労さん、ごめんなさいと伝え私の終戦としたい。

終戦後の北満チチハル

北海道 鈴木 衛 美

昭和十二年に渡満した両親（中山由造・ミサ）は黒竜江省チチハルで、南台宮飛行場にあった将校クラブ、城内の静修寮、天斉街の独身寮（官公署）の賄業をしていた。

終戦直前は天斉寮だけを扱っていたがその寮の建物はレンガ造りで室数が百二十もある非常に長い建物であった。

戦争が終幕に近づくにつれ、若い人、壮年者は次々召集されて行き警察官、軍事郵政、警護隊員らの方たちと、老齢の高等官の僅かな人達だけが寮員として残っていた。

食糧庫には十分な主食、調味料が確保されていたが、

そのことが帰国までの一年間大いに役立つことになるとは知る由もなかったのである。

日本の戦況が日増しに不利になるにつれて東京・大阪のB29による大空襲が始まった。命からがら逃げてきた人々によってその惨状が伝えられたのであったが満州の場合、B29の飛行距離は新京市止まりで北満までは空爆が及ばずにいたのである。

昭和十八年頃は、まだ映画館やダンスホールなども盛んで市民生活もゆったりした状態で日々を大いに楽しんでいた。もちろん防空壕なども掘らずにいたのである。

終戦の年の五月頃、憲兵隊本部の正面にある菊のご紋章が何時の間にか外されていた。ボーイ頭の張さんが母に「近々日本が危ないヨ」と言ったそうであるが、そのことは誰にも言ったらいけないとさとしていたのを耳にしたことがあった。チチハルは、あの有名なパセンザンの本拠地なのだから今から思うとそのような情報などは日本人が知らないだけで現地の人々の間では周知のことだったのである。

終戦直前になって関東軍司令部から市民に対して三日